

contentsの二格構文をめぐって

安 平 鎬

キーワード：contents(構成物、内容物)、語順、状態性、属性(所有者)、自動詞文

要 旨

二格名詞句の表す意味については、数多くの先行研究で論じられている。しかし、「AがBに述語(あふれる・まみれる等)」といったタイプの文に出現する二格については、そのほとんどの先行研究では慣用的な表現として扱われ、それ以上の検討はなされていない。本稿では、「あふれる」「まみれる」「欠ける」などを述語とする文に出現する二格を、「contentsの二格」としてまとめ、その性質を明らかにする。本稿の分析によって、その他の二格の意味役割との関連性を詳細に捉え、このタイプの二格名詞句の適切な位置づけが可能になった。

0. はじめに

日本語の二格の表す意味には、研究者によって分類の立場は違うものの、いろいろなものが含まれていることはよく知られている。例えば、益岡・田窪(1987)では、(1)に示すように分類している。

- (1) a この大学は駅の前にある。[存在の位置]
- b 私には子供が三人ある。[所有者]
- c 3時に会議がある。[動作や事態の時、順序]
- d 私にはそれができない。[動作主]
- e 壁にカレンダーを貼る。[着点]
- f 信号が赤に変わる。[変化の結果]
- g 子供にお菓子をやる。[受取手・受益者]
- h 恋人に会う。[相手]
- i 親に逆らう。[対象]
- j 買い物に行く。[目的]
- k 酒に酔う。[原因]

しかし、二格に関する(1)のような記述をもって、すべての二格の用法を説明できるわけではない。以下の例(2)を見ていただきたい。

- (2)a 表情が喜びにあふれている。^{*1}
 b 病人の体が汗にまみれている。
 c 太郎 (は/が) 語学力に欠けている。^{*2}
 d 太郎 (は/が) 経験に乏しい。

(2)の文に出現する二格の意味は、(1)の分類のいずれの項目にもうまく当てはまらない。(2)に見られる二格は、(1)にあげられた二格とは、以下の点において異なる(具体的には後述する)。

- ①これらの二格成分は、出現する文における文中の他の成分との語順から見ると、「AがB二述語」という語順が原則であって、二格成分をガ格成分の前にした「B二Aガ述語」という語順を許容しない。
 ②これらの二格が出現する文は、状態表現がもっとも自然である。動詞述語文の場合、アスペクト的にテイル形が最も自然であり、単純タ形は出現できない。^{*3}
 ③これらの二格が用いられた「AがB二述語」という文の意味は、「Aが、[B二述語]の状態にある」という特徴をもつ。Aには「場所(相当)」の意味を表す名詞が用いられるのが典型である。また、Bは、Aを構成するcontents(構成物・内容物)である。
 ④これらの二格は、動詞述語文の場合、自動詞文にしか現れない。

以上の①、②、③、④の性質をもつ二格をここでは、「contents(構成物・内容物)」の二格と呼ぶことにする。

先行研究では、これらの二格については、主に慣用的な表現として捉えられており、どのような構文に出現するかなど、具体的なことについては、あまり論じられていない。

本稿では、(2)のような文に現れる二格について考察し、これらの二格に共通する特徴を明らかにするとともに、その他の二格との関連性を述べることにする。

1. contentsの二格

1.1. 語順

まず、(2)の文に見られる二格名詞句は、いずれも文の成分として欠かせない必須的な成分である。先行文脈等の支えがない限り、(3)のように、contentsの二格成分を省略することはできない(もしくは情報として不十分である)。

- (3)a *表情があふれている。
- b *病人の体がまみれている。
- c *太郎が欠けている。
- d *太郎が乏しい。

また、contentsの二格に関して注目すべき特徴として、ガ格名詞句と二格名詞句の語順変更が不可能である、という点があげられる。

- (4)a 表情が喜びにあふれている。(=(2)a)
 - b *喜びに表情があふれている。
- (5)a 病人の体が汗にまみれている。(=(2)b)
 - b *汗に病人の体がまみれている。
- (6)a 太郎が語学力に欠けている。(=(2)c)
 - b *語学力に太郎が欠けている。
- (7)a 太郎が経験に乏しい。(=(2)d)
 - b *経験に太郎が乏しい。

(1)に挙げた二格成分の場合は、文中の他の成分と語順が変わると、文の意味は変わることがあるが、非文になることはない*⁴。ところが、(4)b、(5)b、(6)b、(7)bの場合は、二格成分とガ格成分と語順が変わると、文として非文になってしまう。

この語順変更のテストの結果から、contentsの二格構文について以下の(8)に示したような構造をもつと考えられる。

- (8)a [表情が [喜びにあふれている]]
- b [病人の体が [汗にまみれている]]
- c [太郎が [語学力に欠けている]]
- d [太郎が [経験に乏しい]]

contentsの二格構文の場合、ガ格名詞句と二格名詞句との間には階層が存在し、contentsの二格名詞句と述語とがまず一つの単位となって、その全体がガ格名詞句と関係しているのである。

1.2. アスペクトの特徴

contentsの二格が出現する(2)の文について、アスペクト的な観点から考えてみると、動詞述語文の場合、(9)a、(9)b、(9)cに示したように、単純タ形が不自然になる、という特

徴が注目される。

- (9)a *表情が喜びにあふれた。
 a' 表情が喜びにあふれている。(=(2)a)
 b *病人の体が汗にまみれた。
 b' 病人の体が汗にまみれている。(=(2)b)
 c *太郎が語学力に欠けた。
 c' 太郎が語学力に欠けている。(=(2)c)

(9)aと(9)a'、(9)bと(9)b'、(9)cと(9)c'の対比から分かるように、contentsの二格を含む文は、述語に単純タ形が出現せず、テイル形がもっとも自然である。このことから(9)a'、(9)b'、(9)c'の文には、「状態性」というアスペクト的な共通性が認められる。(9)a'、(9)b'のような文は、ガ格名詞（主に場所の意味を表す名詞）の一時的な状態を表し、(9)c'のような文は、ガ格名詞（属性所有者）の性質を表している。

言いかえれば、(9)a'は、「表情が〔喜びにあふれる〕状態にある」という意味を表し、(9)b'は、「病人の体が〔汗にまみれる〕状態にある」という意味として、(9)c'は、「太郎が〔語学力に欠ける〕状態にある」という意味として解釈される。

- (9)d 太郎が経験に乏しい。(=(2)d)

(9)dの文は、「乏しい」という形容詞述語文であり、「状態性」という面では(9)a'、(9)b'、(9)c'の場合と同様である。(9)dは、「太郎が〔経験に乏しい〕状態である」という意味になる。また、(9)dの文も、ガ格名詞（属性所有者）の性質を表す、という面において(9)c'の文と連続している。

1.3. contentsの二格構文の構造——ガ格名詞句と二格名詞句との関係——

contentsの二格が出現する文（contentsの二格構文：以下同じ）は、構造的な面から見ると、以下に示すように「場所ガcontentsニ述語」という特徴をもっている。

- (10)a 表情に喜びがあふれている。
 b 表情が喜びにあふれている。(=(2)a)
 (11)a 太郎に語学力が欠けている。
 b 太郎が語学力に欠けている。(=(2)c)

(10)a、(11)aの文は、「AにBが述語」という格構造をもつ文であり、存在文的な特徴を

もつ。これに対し、(10)b、(11)bの文は「AがBに述語」という格構造をもつ。(10)aと(10)b、(11)aと(11)bは、「AにBが述語」と「AがBに述語」との代換(hypallage)現象が起り、ほぼ同義として捉えられる。^{*5}

前述したとおり、(10)a、(11)aの文には存在文的な特徴があり、「AにBが述語」という文の成分のうち、「Aに」という成分は、「場所(locative)」の意味を表す。したがって、(10)a、(11)aの各々の文に対応する(10)b、(11)bの文における「AがBに述語」という成分のうち、「Aが」の部分も「場所」の意味を表すと捉えて差し支えないであろう。

- (12)a 太郎に経験が乏しい。
- b 太郎が経験に乏しい。

(12)の「乏しい」という形容詞を述語とする文でも、「AにBが述語」と「AがBに述語」との代換(hypallage)現象が起り、ほぼ同義である。この点において、(12)は、(10)と(11)に連続している。

つまり、(9)a'、(9)b'、(9)c'、(9)dのcontentsの二格構文におけるガ格名詞句は、「場所(相当)」の意味を表す名詞が来るのが典型である。ただし、(9)c'、(9)dのように「有情名詞+ガ格」の場合は、ガ格名詞句が属性所有者を示す。また、ガ格名詞が有情名詞の場合、二格名詞は「抽象(abstract)名詞」である。

場所が	contents二	述語 (あふれる・満ちる・等)
-----	-----------	-----------------

また、contentsの二格構文において、ガ格名詞と二格名詞との関係は、ガ格名詞(場所の意味)を構成するcontents(構成物・内容物)という関係にある。ただし、有情名詞ガ格の場合は、属性所有者と属性(性質)という関係である。

次節からは、contentsの二格を許容する述語の具体例を取りあげて詳しく検討する。

2. contentsの二格が出現する述語類

2.1. 「あふれる」「満ちる」

安(1996)では、「あふれる」という動詞を述語とする文には、(13)に示したような二つのタイプの代換(hypallage)現象が起り、このような代換現象が起こる文は、「発生による変化」を意味する、ということについて述べた。

- (13)a 「Aに B (抽象名詞) が あふれる」 ↔ 「Aが Bに あふれる」
- b 「Aに B (具象名詞) が あふれる」 ↔ 「Aが Bで あふれる」

(13)aのタイプ、すなわち「AがBにあふれる」のタイプについては前節で述べたので、これ以上触れないが、ここでは、(13)bのタイプについて一点だけ補足する。

- (14)a 目に涙があふれている。
b 目が涙であふれている。

(14)bの文は、「AがBで述語」という格構造をもっているが、(15)で示したような構文的性質をもっているという面で、contentsの二格構文と同じ振る舞いをする。「あふれる」という動詞を述語とする文に、「涙」のような具象名詞が成分として出現した場合、(13)bと(14)に示したような代換現象が起こる。(14)aと(14)bの代換現象が起こることから「目」という名詞は場所の意味として解釈できる。(15)bの文は状態表現がもっとも自然であり、ガ格名詞句とデ格名詞句との語順変更を許容しない((15)a)。また、「目」と「涙」との関係は、全体とその全体を構成するcontentsという関係である。

- (15)a *涙で目があふれている。
b 目が涙であふれ(ている/*た)。

それでは、なぜ「具象(concrete)名詞」の場合は、デ格が用いられるか、という点が問題になるが、まだはっきり分らない。

- (16)a 目に涙がいっぱいだ。
b 目が涙(*に/で)いっぱいだ。
c ??涙で目がいっぱいだ。

また、(14)bの文は「AがBで述語」という格構造をもつという面は、(16)bの「いっぱいだ」という形容動詞を述語とする文と連続している。(16)の文にも、(16)aと(16)bのような代換現象が認められる。(16)cから分かるように、ガ格名詞句とデ格名詞句との語順変更を許容せず、しかも状態表現である。

2.2. 「まみれる」

「まみれる」という動詞の辞書的な意味は、「一面につく・たくさんついて汚れる」という意味である。(17)aの文は、「病人の体が、一面に「汗」がついて汚れている(汚れた状態にある)」という意味として解釈できる。まず、「まみれる」という動詞を述語とする文は、(17)aと(17)cとの対比から分かるように、二格の成分を省略することは不可能であり、(17)bのようにデ格も許容しない。繰り返しになるが、(17)aの文は、単純タ形は出現

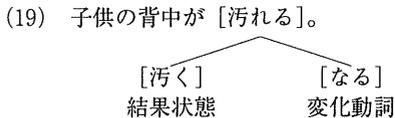
できず、テイル形が最も自然であり、「*汗に病人の体がまみれている。」という語順変更を許容しないのである。

- (17)a 病人の体が汗にまみれている。(=(2)b)
b??病人の体が汗でまみれている。
c *病人の体がまみれている。

(17)aの文に見られるcontentsの二格について、「まみれる」と意味的に類似した「汚れる(1)」という動詞を述語とする文と比べてみると、その特殊性が分かる。^{*6}

- (18)a 子供の背中が泥 (?に/で) (汚れている/汚れた)。*7
b 子供の背中が (汚れている/汚れた)。
c 子供の背中を泥で (汚す/汚した)

「まみれる」を述語とする文は、(17)cが許容されなかったのに対し、「汚れる(1)」という動詞を述語とする文は、(18)bが成立する。(18)bから「汚れる(1)」という動詞には、(19)のように主格の変化した結果状態(「汚い」)が動詞の意味に含まれている変化動詞的な面があることが分かる。



(18)bが成立することから、(18)aや(18)cの文に出現する二格やデ格は、非必須的な成分であることになり、この点は「まみれる」を述語とする文に見られる二格とは異なる。(17)aの文は、「汗にまみれる」という動詞句全体がガ格名詞(子供の背中)の状態を表しているが、(18)aの文は、「汗に」のような要素がなくても、「汚れる(1)」という動詞だけでガ格名詞(子供の背中)の状態を表すことができるのである。

また、「汚れる(1)」の動詞を述語とする文は、(18)の文の括弧の中に示したように、単純タ形を許容しており、(20)のように語順の変更も自由である。

- (20)a 泥 (*に/で) 子供の背中が (汚れている/汚れた)。
b 泥で子供の背中を (汚す/汚した)。

(18)aの文を、(21)の文と比較してみると、(18)aの「泥で」と(21)の「埃に」との違い

がはっきり分かる。

- (21)a 選手の体が汗で埃にまみれている。
 b *選手の体が埃に汗でまみれている。

「まみれる」という動詞の意味は、前述したとおり「(何かが) 一面について汚れる」という意味である。(21)aの文における「埃に」という成分は、「一面につく」モノにあたる。また、(21)bが許容されないことから、(21)aの文の「埃に」という成分 (contentsの二格) は、かなり動詞寄り (動詞から分離できない) の成分であることが分かる。

2.3. 「汚れる(2)」

「汚れる」を述語とする文には、上述した(19)のタイプの文のほかに、(22)のタイプの文 (「汚れる(2)」) も見られる。

- (22)a 太郎の手が悪事 (に/*で) (汚れている/*汚れた)。
 b *悪事に太郎の手が汚れている。
 c #太郎の手が汚れている。 (#: 文としては成立するが、意味が違う場合)

「汚れる(2)」という動詞を述語とする文は、(22)aの文のように単純タ形もデ格も許容しない。また、(22)bのようにガ格と二格の語順変更も成立しないことが分かる。(22)cの文は、文としては成立するが、(文脈などの支えがない限り) 第一義として物理的な状態変化 (「汚くなった」という意味) を意味するのが普通であろう。(22)から、「汚れる(2)」を述語とする文に出現する二格は、本稿でいう contentsの二格に相当する。^{*8*9}

2.4. 「欠ける」「すぐれる」「たける」「富む」

「欠ける」を述語とする文には、(23)aの「AがBに欠けている」といったタイプの文がある。(23)aの「品質に」という成分は、文の成立に欠かせない成分である。

- (23)a この製品は品質に欠けている。
 b *この製品は品質に欠けた。
 c *品質にこの製品が欠けている。

「欠ける」を述語とする文(23)aは、(23)bと(23)cから分かるように単純タ形を許容しない。また、「BにAが欠けている」という語順も許容しない。「欠ける」という動詞は、いつもテイル形として用いられるので、「状態性」という特徴も認められる。「製品」と「品

質」の関係は、全体とその全体を構成するcontentsという関係である。このような特徴は、本稿でいうcontentsの二格と共通する面であり、「すぐれる」「たける」「富む」という動詞に関しても同様のことがいえる。

ただし、(23)aの「品質に」という成分には、「品質」という名詞の語彙的な意味以外に「品質がいい」とか「品質が悪い」とかいう基準の意味が含意される。

(24) この製品は望むべき品質に欠けている。

(23)aの文に、「望むべき」のような語句を補うと、基準という意味がもつとはっきりしてくる。文全体としては「この製品は品質という面で、ある基準に達していない」という意味になる。この点、「まみれる」「汚れる(2)」という動詞を述語とする文に出現するcontentsの二格と異なる点である。以下の例を見ていただきたい。

- (25)a 彼には持続力が不足している。
b 彼は持続力(??に/*で)不足している。
c *彼は思いやりに不足している。
- (26)a 太郎には常識が欠けている。
b 太郎は常識(に/*で)欠けている。

(25)aと(26)aの文は、存在文的な特徴をもっており、「持続力が」と「常識が」という成分は、「対象(theme)」を表す。これに対し、(26)bの文の「常識に」という成分は、(25)aと(26)aの文とは異なって単なる対象(theme)ではなく、「(話者がもっている)基準」という意味が含意される。「(話者がもっている)基準」とは、例えば(26)aでは、「太郎に常識があるかどうか」という判断に対し、話者のもっている基準のことをいう。

また、この基準という意味は、「量」として捉えられる成分を補語としてとる動詞を述語とする文には含意されにくく、「質」として捉えられる成分を補語としてとる動詞を述語とする文には含意されやすいという傾向がある。逆に言えば、「欠ける」「すぐれる」「たける」「富む」という動詞を述語とする文は、「質」として捉えられる成分が二格として出現し、「AがBに述語」という格構造をもつ。この場合、二格名詞句には、基準の意味が含意されるのである。

(25)bや(25)cからわかるように、「不足する」という動詞を述語とする文の場合、「AがBに不足する」という格構造では成立しない。

(27)??この製品は品質が不足している。

(27)からもわかるように、「不足する」という動詞は、「品質」などといった名詞を文の成分としてとることができない。「品質」という名詞は、「量」的にはとらえられない名詞である。これに対し、(25)の文に用いられている「持続力」という名詞は、(25)aから「量」的にはとらえられる名詞であり、基準という意味が含意されないので(25)bや(25)cが成立しない。(26)の文に用いられている「常識」という名詞は、「質」的な意味を表し、基準という意味も含意される。

(28)a ?太郎には語学力がすぐれている。

b 太郎は語学力 (に/*で) すぐれている。^{*10}

(29)a ?花子には作文力がたけている。

b 花子は作文力 (に/*で) たけている。

(30)a ?太郎には才能が富んでいる。

b 太郎は才能 (に/*で) 富んでいる。

(28)a、(29)a、(30)aが文としての許容度が多少落ちるのは「語学力」「作文力」「才能」などの名詞が「量」的にも捉えられるからであろう。

2.5. 「乏しい」

(31)a 太郎は経験に乏しい。

b *経験に太郎が乏しい。

(32)a 韓国は石油資源に乏しい。

b *石油資源に韓国が乏しい。

(31)や(32)の文に用いられている「経験に」「石油資源に」という成分は、文の成立に欠かせない要素であり、(31)bや(32)bのように「BにAが乏しい」という語順を許容しない。形容詞述語文なので状態性という特徴をもつ。この特徴は、本稿でいうcontentsの二格に共通する性質である。

また、「経験に」や「石油資源に」という成分に基準という意味が含意されるが、これは、「欠ける」などの動詞と連続している。^{*11}

3. contents構文とその他の構文との関連

3.1. 「詰まる」と「窮する」

「詰まる」を述語とする文は、奥津(1981)で説明している「移入変化動詞」構文として

の説明が可能である。^{*12}

- (33)a パイプにゴミがぎっしり詰まっている。
- b パイプがゴミでぎっしり詰まっている。

奥津によると、(33)aの文は、「モノ（ゴミ）が移動することによって、その移動先である場所（パイプ）が述語の表す意味の状態にある」という意味になる。^{*13} 一方、(33)bの文は、場所（パイプ）の変化の結果状態を表す文であり、この場合の「（ゴミ）で」というのは、起因もしくは原因になるであろう。

(33)aと(33)bの文の場合、(33)cと(33)dのように語順変更は何の影響も見られない。

- (33)c ゴミがパイプにぎっしり詰まっている。
- d ゴミでパイプがぎっしり詰まっている。

以上で述べた(33)bの文や(34)aの文は、同じく場所（場所相当）を表す名詞がガ格の場合であるが、(33)cと(33)dの語順変更テストと(34)bと(34)cの語順変更テストを比べてみると、語順変更に対する許容度に違いが見られる。

- (34)a 胸が詰まる。
- b 悲しみ（に/で） 胸が詰まる。
- c??胸が悲しみ（に/で） 詰まる。

(34)bの文に出現する「悲しみ」等は、物理的な移動が不可能な抽象的な要素であり、(34)cの語順変更が許容されないことから「悲しみ（に/で）」という成分は「胸が詰まる」という動詞句の外側の要素であることが分かる。

- (35)a 太郎の突然のプロポーズに花子が返事（に/*で） 詰まっている。^{*14}
- b 花子が太郎の突然のプロポーズに返事（に/*で） 詰まっている。
- c *花子が返事（に/で） 太郎の突然のプロポーズに詰まっている。
- d *返事（に/*で） 花子が詰まっている。

(35)の文は、(34)の文と同様に「詰まる」を述語とする文であるが、「返事に」という成分の振る舞いは、(34)の「悲しみに」という成分とは異なる。両方とも物理的な移動は不可能な要素であるが、(35)cと(35)dから「返事に」という成分は、(36)に示したように「詰まる」という動詞から分離することができない。

(36) [花子が [返事に詰まっている]]

このような面から考えてみると、(35)aと(35)bの文に見られる「返事に」という成分は、本稿でいうcontentsの二格と関連性があると考えられる。

3.2. 「恵まれる」

「恵まれる」という動詞を述語とする文には、以下のような文がある。

(37)a 日本は温泉に恵まれている。

b *温泉に日本が恵まれている。

(37)の文の述語「恵まれる」は、形態的に受動形である。しかし、文全体の意味は、「他の存在から動作や作用を受けた(受影性)」という受動文本来の特徴をもっていない。ほぼ自動詞文に近い性質をもっていると言える。

「恵まれる」という動詞を述語とする文は、(37)bのように「BにAが恵まれる」という語順は許容しない。また、「日本」と「温泉」との関係は、全体と全体を構成するcontentsという関係である。このような特徴は、(37)の文の「温泉に」という成分は、本稿でいうcontentsの二格と連続的である。

4. 結論と今後の課題

本稿では、「まみれる」「汚れる(2)」「あふれる」「乏しい」などを述語とする文に出現する二格名詞句をcontentsの二格と呼び、考察を加えた。

考察の結果、contentsの二格構文は、①「AがBに述語」という語順しか許容しない、②アスペクト的に単純タ形が出現できず、テイル形がもっとも自然であると、③ガ格名詞句には「場所」の意味を表す名詞が用いられるのが典型的であり、ガ格名詞句と二格名詞句との関係は、全体とその全体を構成するcontentsという関係である、④基本的に自動詞文である、ということが分かった。また、contentsの二格が出現する述語の具体的な例を取りあげて他の構文との関連性と違いについて指摘した。

contentsの二格については、単なる分類だけではなく、最終的に二格全体の機能や意味(矢澤(1994)や和氣(1996)など)の中でどう位置づけられるか、当然問題になる。今後の課題にしたい。

注

- *1 「あふれる」を述語とする文に出現する二格と「原因」格との違いについては、安(1996)p.19を参照されたい。「満ちる」という動詞も「あふれる」と同じタイプの動詞である。
- *2 「欠ける」「乏しい」などを述語とする文の場合、「は」のほうが自然であり、「が」が用いられた場合は、「指定文」的な解釈になりやすい。以下では、このようなことを認めた上で、「が」で統一して議論する。
- *3 連体修飾の場合は除く。また、小説の地の文などの特殊な例には単純タ形が許容される場合がある。
- *4 久野(1973)によると、存在文の基本語順は「L(場所)S(主語)V(述語)」とされる。久野氏は、S L Vの語順で非文法的な文型として次の例を挙げている。
- (例)車内に居眠りをしている乗客があった。???居眠りをしている乗客が車内にあった。
- 一年に365日ある。???365日一年にある。
- 昔々、あるところにおじいさんとおばあさんがありました。
- ??昔々、おじいさんとおばあさんがあるところがありました。
- このほかにも存在文の語順に関する研究としては、郡(1996)などがある。
- *5 「まみれる」を述語とする文には、「AにBが述語」と「AがBに述語」との代換(hypallage)現象が起こらない。
- (例)a *病人の体が汗がまみれている。
- b 病人の体が汗にまみれている。
- しかし、(例)bの文と、「あふれる」「欠ける」などを述語とする文、特に「AがBに述語」という構造をもつ文の構文的な性質が類似しているため(後述)、本稿では、同じタイプとしておく。
- *6 本稿では、「汚れる」という動詞を「汚れる(1)」と「汚れる(2)」とに分ける。「汚れる(2)」については後述する。
- *7 「子供の背中が泥に汚れている。」の文について、話者によっては「許容する」と答えた人もいる。
- (例)a *泥に子供の背中が汚れている。
- b *子供の背中が泥に汚れた。
- c *子供の背中を泥に汚す。
- このような話者には、「汚れる(1)」という動詞についてもcontentsの二格の用法が存在することになる。(例)a、b、cから分かるように、ガ格名詞句と二格名詞句との語順変更が不可能であり、単純タ形も出現できず、他動的な用法も存在しないからである。
- *8 「けがれる」という動詞を述語とする文に出現する二格についても同様のことがいえるであろう。ただし、(例)bのように、二格が省略可能である点は「汚れる(2)」と異なる。
- (例)a 太郎の手が悪事にけがれている。
- b 太郎の手がけがれている。
- *9 「汚れる(2)」を含む文については、「染まる」を含む文との関連性が考えられる。
- (例)a 手が悪事に染まっている。
- b 悪事に手が染まっている。
- c 手を悪事に染める。
- (例)aの「悪事に」に対しては、contentsの二格とは認めがたい。(例)bの語順変更も成立しており、(例)cのような他動詞構文も成立しているからである。
- (例)d 太郎が悪事に(染まっている/染まった)。
- e *悪事に太郎が染まっている。
- f *太郎を悪事に染める。
- (例)dに関しては、単純タ形は成立しているが、eとfからcontentsの二格に連続していると考えられる。

- *10 「ひいでる」「ぬきんでる」という動詞も「すぐれる」という動詞と同じタイプの動詞と思われる。
- *11 「厚い」「うすい」「詳しい」などの形容詞を述語とする文にも、「AがBに述語」という格構造をもつ文が存在する。この場合、(例)bと(例)eから分かるように、語順変更が不可能である。この点、contentsの二格と関連していると考えられる。しかし、①「AにBが述語」と「AがBに述語」との代換が起こらない、②「情に」「サッカーに」という成分には基準という意味が含意されない、という点はcontentsの二格と異なる面である。
- (例)a 太郎は情に(厚い/うすい)。
 b *情に太郎が(厚い/うすい)。
 c *太郎に情が(厚い/うすい)。
 d 太郎はサッカーに詳しい。
 e *サッカーに太郎が詳しい。
 f *太郎にサッカーが詳しい。
- *12 「移入変化動詞」については、奥津(1981)の議論を参照されたい。
- *13 奥津(1981)の用語では、本稿でいう「その移動先である場所」は「着点」にあたる。
- *14 「困る」のような動詞を述語とする文、(例)aに出現する二格成分(「返事に」)は、一般的に「原因」の意味として解釈される。この「原因」の意味を表す成分に関しても、(例)bの示したように語順変更が成立しない。この二格成分とcontentsの二格との関連性についても考えるべきであるが、本稿では取りあげない。
- (例)a 太郎は返事に困っている。
 b *返事に太郎が困っている。

参考文献

- 安 平鎬(1996)「自動詞文の格の代換について——「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に——」『日本語と日本文学』23筑波大学国語国文学会
- 奥津敬一郎(1981)「移動変化動詞文——いわゆる spray paint hypallageについて——」『国語学』127 国語学会
- 久野 暉(1973)『日本文法研究』大衆館書店
- 郡 博子(1996)「存在文の語順」『言語探求の領域——小泉保教授古希記念論文集——』大学書林
- 益岡隆史・田窪行則(1987)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版
- 矢澤真人(1994)「格」と階層」『森野宗明教授退官記念論文集 言語・文学・国語教育』三省堂
- 和気愛仁(1996)「に」の機能」『筑波日本語研究』創刊号 筑波大学 文芸・言語研究科日本語学研究室

(1997年9月2日 受理)